

第8回カンボジアスタディツアーを通して

神奈川県立有馬高等学校 Aoi O.

私は、2024年7月29日から8月5日にかけて、第8回カンボジアスタディツアーに参加させていただきました。このニュースレターでは、主に教育と過去の内戦の2つのことをまとめました。

【教育について】

日本ユネスコ協会カンボジア事務所を訪問した際、カンボジアの寺子屋活動について教えていただきました。寺子屋には、初等教育におけるドロップアウト率の低下を目指すものや、栄養摂取による健康な体作りと、学習効率の向上を目的とするものなど様々なプログラムがあります。その中でも、特に印象に残っている修学支援プログラムと収入向上プログラムの2つを紹介します。

【修学支援プログラム】

修学支援プログラムは、小学校を中途退学した子どもたちに、寺子屋で再び学習する機会を提供するプログラムです。ここでは小学校の課程を2年間で修了できるよう編成されていて、修了試験に合格すれば公教育の中学校で勉強を続けることができます。この修学支援プログラムでは年間約500人の子どもたちが参加し、中学校での勉強を目指しています。貧困な地域では10年ほど前まで、生計を立てるためには子どもの力が必要であり、勉強させる必要がないという考えが一般的であったそうです。そして今もなお、主に家庭の手伝いや住居の維持といった家庭事情によりドロップアウトする子どもが多くいます。私は通常6年間の教育の課程を2年間で修了させるということに多くの疑問を持ちました。いくらこのプログラムの効率が良いとはいえ、4年分の教育というのは、子どもにとって、とても大きいものだと思います。

UNESCO プノンペン事務所（図1）を訪れた際、教育というのは、情報教育や環境教育、文化を守るための教育など、生きるために必要な知識全てとつながっている大事な役割だと学び、教育の大切さを再認識しました。だからこそ、就学支援プログラムはとても大切なものであると思いますが、教育を受ける機会を失わないために児童労働などのドロップアウトがおきる背景を知り、誰もが公教育の小学校で6年間学ぶことができる基盤を構築していくことが必要であると強く感じました。



図1. UNESCO プノンペン事務所にて

【収入向上プログラム】

収入向上プログラムは、職業訓練などを提供することで、自立した最低限の生活を支援するプログラムです。これにより、今に至るまで約400世帯の人々が、生活のための収入がない状態から、収入を自分自身で得ることができるようになりました。最低限の生活を送ることができると、まず栄養不足や

飢餓の恐れがなくなり自分自身の安全性が守られます。これは、生活においても心の拠り所の1つとして大切な環境であり、後に教育や愛情といった形にも変化すると思います。このように、貧困による暴力や犯罪のない安全を確保することで他にも波及効果があり、このプログラムの重要性を感じました（図2）。

【寺子屋での活動を通して】

寺子屋の教育活動では、授業の様子を見たり、実際に参加してみたり、折り紙を一緒に折ったりしました（図3）。子どもたちに将来の夢を聞いたところ、警察や軍人、学校の先生など、皆が大きな夢を抱いていました（図4）。そんな夢を持った子の中には、勉強できることが一番の幸せだという子も多く、発言する際にも「自分を当てて！」と積極的にアピールしている姿に、日本の子供との教育に対する向き合い方、姿勢の違いというものを感じました。趣味は、本を読むこと、サッカーをすること、友達と鬼ごっこをすること…、と子どもらしく日本の子どもとも似たような部分が多いのに、何が彼らにそれほど意欲を与え、彼らの原動力となっているのだろうと考えました（図5）。私は教育というものが彼ら自身の人生の中でどれほど重大な役割を果たすのかを理解できているからではないかと思いました。そして、日本の平和や識字率の高さ、教育の基盤の強さというものは、何もしなければ生きていくことができない世界と比較して、良い面はあるも一方で、教育の姿勢が高く保たれないという一面につながっているのではないかと感じました。

【過去の内戦について】

クメール・ルージュ時代の影響で、教育現場で様々な問題（学校、教員不足など）が存在します。当時の独裁者であるポル・ポトを中心に「再市民化0年」による、農村部への強制移住、集団農場での強制労働が行われたほか、知識人層を中心に約200万人のカンボジア人が、虐殺、拷問、飢餓などで命を落としました。私は今回ツールスレン博物館と、キリング・フィールドを訪問し、想像以上の非情な過去の現実を目の当たりにしました。キリング・フィールドには、殺害された人々の頭蓋骨が積み重ねられ、



図2. 日本ユネスコ協会カンボジア事務所にて



図3. 小学校（復学支援）クラスの授業の様子



図4. LSEP（中学校クラス）で夢を語る女子生徒



図5. 子どもたちとの交流の様子

人々が着用していた衣服やメガネなどの遺品が展示されていました。また、ツールスレン虐殺博物館では被害者の顔写真、実際に拷問を受けた部屋などを見学しました。今から約50年前という、そう遠くはない過去で実際に行われていた拷問の様子を知ったときは強い衝撃を受けました（図7）。人権と自由が守られることが当たり前として過ごしている今、この環境をより大事にしようと思えたとともに、今後同じような出来事を起こさないよう私達には自分事として歴史と向き合っていく必要があると思いました。そのために国や地域が違って私には必ず平和教育及び命の大切さが必要であると考えました。歴史を知ること、そして自分で考えて行動を起こすことが、これからの平和構築につながると思います。そして資料というものは、その時代のことを知るだけでなく、人々に関心や考える機会を与え、新たな価値観を生み出してくれるものです。平和の大切さを訴える正しい資料を一つの証人とし、世代から世代へと保存されるべきだと感じました。

【感想】

私は今回のスタディツアーで多くの景色を見ました。情報としては知っていたものの、実際見て学んだ景色と経験は、帰国してからも考えさせられることが多く強く印象に残っています。寺子屋の空調環境の悪さや生徒の自宅の構造を目の当たりにしたとき、日本に住んでいる私にとって不便と感ずることも多くありました。それを当たり前として生きている人たちと触れ、自分の価値観や当たり前だと思っていた常識を見つめ直すことができました。そして一つの課題に対して多角的な視点で見ることが大切だと感じました。今までは偏見や思い込みなどが強かったものの、実際に見る景色からは学びや、理解し考えていく課題を多く得られました。また、国のため、子供の未来のために働く多くの人と接していく中で、私も人のために何ができるか考え続け行動を起こしていこうと思いました。

今回のスタディツアーでの多くの学びから、自分が貢献できる人材として少しでも多くの人に影響を与えられるよう、かけがえのない当たり前の気持ちを胸に、あらゆる活動を行っていきます。このスタディツアーに携わっていただいたすべての方に感謝申し上げます。



図6. キリング・フィールドにて
(キリングツリー/小さな子どもたちがこの木に頭を打ち付けられた)



図7. ツールスレン虐殺博物館にて
(当時のことを聞く様子)



図8. アンコールワット前で仲間とともに